

第16回大会 盛会のうちに終了!

第16回大会報告

川瀬 麻衣

2016年5月28日(土)、キリスト教礼拝音楽学会第16回大会が開催された。当日は一面の曇り空で、五月晴れの好天とは行かなかったものの穏やかな天候で、数日前には真夏日を記録したことを考えると、過ごしやすい天候に恵まれた。今回は、3年ぶりとなる東京での開催で、多くの会員・非会員の参加者を迎え、活気溢れる大会となった。

午前中の会場となった立教学院チャペル会館マグノリア・ルームは、2013年7月に竣工した、立教大学池袋キャンパスで最も新しい建物の2階に位置し、諸聖徒礼拝堂より移設されたベクセラート・オルガンを擁する50席程度の小ホールで、普段は同学キリスト教学研究科の教会音楽関連科目の授業が行われている。

会長開会挨拶

大会は定刻の10時丁度に、昨年度より就任された伊東辰彦学会長の開会挨拶をもって開会した。発足した当時には、数年しかもたないのでは、との意見もあった本学会が、自由闊達な空気のもと活発な議論を続け、16回を重ねることができたことの喜びに満ちた挨拶であった。

研究発表1

引き続きの研究発表、一人目は当学会員であり、エリザベト音楽大学講師の佐々木悠氏による「20世紀初頭の教会音楽におけるグレゴリオ聖歌—『カトリック教会音楽ハンドブック』に見られるその特徴」と題されたものであった。これはここ数年、同氏が研究対象としているドイツにおける教会音楽家教育に用いられていた、20世紀初頭の教科書のうちでも、初期のものである『カトリック教会音楽ハンドブック』(1909年)において、グレゴリオ聖歌がどのように扱われてきたかを報告するものである。

同書においては、全600ページ以上のうち、およそ1割がグレゴリオ聖歌に充てられている。構成順としては、概要の次に演奏法が位置するなど、内容的には実践的なものとなっている。また、音価の説明に関しても、ロング、プレビス、セミプレビスを全音符、二分音符、四分音符として説明するなど大雑把なものであったという。また、

写本における古ネウマには触れられず、四線記譜法を前提としたものである。その他、特徴的な表現としては、レガート唱法の記述、言葉と旋律、音形の関係などが強調されていた。

次に、教会旋法についての記述が続くが、これも時代的に異なる旋法をいっしょに扱う、Dur-mollに旋法を帰結させようとするなど、当時の理解を反映したものであった。続いての詩篇唱についての記述としては、各ジャンルの詩篇唱が幅広く取り上げられるなどの特徴が指摘された。また、グレゴリオ聖歌のオルガン伴奏に機能合声を使うなどの特徴が挙げられていた。

今後の課題としては、20世紀初頭の同書に19世紀の影響がどのように残り、現場でどのようにグレゴリオ聖歌が歌われていたのか、が明らかになってくるのではないかと、とのことであった。いずれにしろ、いわゆるグレゴリオ聖歌のセミオロジーが成立する以前のことであり、19世紀の諸文献との比較を中心に研究を進めて行きたいとのことであった。

引き続きの質疑応答では、発表者の今後の研究への期待と激励の表明、セミオロジーの問題点の指摘など、多岐にわたった質問がなされ、活発な議論が行われた。

研究発表2

続いては筆者(川瀬麻衣)による研究発表が行われた。この発表は「月刊『讃美』誌に見る太平洋戦争前・中の教会音楽事情」と題されたもので、発表者が博士課程において『興亜讃美歌』(1943年)を中心とする戦時讃美歌研究の過程で出会った月刊『讃美』誌についての発表であった。発表者は40歳代半ばで、本来ならば研究者としては中堅の域に入るべき年齢ではあるが、今回の発表が初めての研究発表ということで、非常に緊張しながらの発表となった。

発表は今回の研究発表の対象である月刊『讃美』誌についての説明から始まった。同誌は、戦前から戦中にかけて讃美歌委員会より発行されたもので、A4判相当で4面(後に戦況が悪化すると2面)の小規模な印刷物であり、これまではほとんど日の目を見なかったものの、戦前・戦中の教会音楽の動向を今に伝える貴重な史料として紹

介された。

発表は最初に発表者が同誌を覚知した経緯や、入手経路に触れられた。同誌はある程度まとまった量では立教大学の海老澤有道文庫に所蔵されているが、その他にはフェリス女学院大学にほぼ同量のコピーが残されるだけの非常に貴重な史料である。しかし、書誌的には巻号表記に不明確な点があるなど、その創刊・終刊の時期すら不明、発行部数や流通の実態も不明という謎に包まれた史料である。

発表は、同史料から読み取れる戦前・戦中の教会音楽の動向を主なテーマとして扱った。記事内容における第一の特徴としては、創作讃美歌充実の提唱が挙げられた。これは、日本独自の讃美歌としての創作讃美歌の必要性を強く提唱し、多くの関連記事を掲載し、これに関連する記事として、一般読者が讃美歌を作詞あるいは作曲する際の手引きとなる記事も掲載していた。特筆すべき点としては、日本人の手による創作讃美歌を強く希求する一方で、福音唱歌に由来する、讃美歌集において「雑」という分類に当たる讃美歌を「西洋的かつ低俗」として忌避したことが挙げられる。

さらに、同紙においては讃美歌論に関する記事などの会衆讃美に関する記事のほか、聖歌隊に関する記事やオルガンに関する記事が掲載されているが、これらは太平洋戦争の開戦後は皆無となり、教会音楽の世界も戦時体制となっていたことが指摘された。

本発表は同史料に関するきわめて概略的なものであったが、続く質疑応答では礼拝に用いられる音楽全体に関する意見が交わされるなど、多岐にわたる意見が活発に表明された。

講演「英国ロマン派のオルガン」

引き続き、開催地である立教大学の教会音楽ディレクター、文学部教授のショウ・スコット氏による英国ロマン派のオルガンに関する講演が行われた。1790年製作のロチェスター主教座聖堂のオルガンから1870年製作のサルズベリー主教座聖堂のオルガンまでのおよそ100年間にイギリスのオルガン界に起こった改革が順を追って丁寧に解説された。

ペダル鍵盤をもたず、イギリスのオルガン作品の演奏には最適な、しかしドイツを初めとする大陸のオルガン作品を演奏するには全く不向きな1800年ごろのオルガンの紹介から始まり、それに続く鎖国的なオルガン製作が続いた時期、1840-1860年ごろのドイツ式オルガンの導入、1851年のロンドン万博に海外メーカー製の楽器が展示されたことに端を発する外国製楽器の影響、そして典礼とオルガンの関係が変わってきた時代背景の中で、ビクトリア朝のオルガン製作が大ブームとなった18世紀末に至る事情が明らかにされた。

島国であり、英国国教会という他の国とは違う宗教的文脈の中でありながらイギリスのオルガンは、ドイツや



① 会場案内の設置 ② 受付風景 ③ 伊東辰彦会長の挨拶
④ 佐々木悠会員の研究発表 ⑤ 川瀬麻衣会員の発表

18世紀末にはフランスのカヴァイエ・コルのスタイルの楽器の影響すら受けつつ、独自の発展を遂げてきた、ということがいくつかのオルガンのストップリストとともに解説されたが、立教大学に在学し、日ごろイギリスのオルガン音楽に親しんでいる筆者にも目新しいことが多く、興味深いものであった。

立教大学所蔵日本楽器製造(株)山葉製19ストップリードオルガンに関する説明

午前中最後のプログラムは学会員の赤井励氏ならびにリードオルガンの演奏家で修復家の伊藤園子氏によるリードオルガンの解説が行われた。このリードオルガンは立教大学が数年前に茅ヶ崎教会より譲り受け修復したもので、もともとはNHKが内幸町にあったころに放送用に使用していたものである。この楽器は当時のメーカーのラインナップでは最高級のものに属し、きわめて製造台数が少ない貴重なもので、現存する同型のもは他に浜松市楽器博物館所蔵の一台のみとのことである。

解説は、伊藤氏の手によって筐体の一部を開けて、内部構造を示しながら行われた。太平洋開戦前後の物資に制約があった時期の製造とは思えないしっかりしたつくりの楽器であった。なお、この楽器の1938年時点での定価は1300円、現代の物価にスライドさせると500万円以上という非常に高価なものであったことも特筆に価するであろう。

演奏「英国のオルガン音楽」

昼休みならびに総会を挟み、午後は会場を礼拝堂に移して演奏を主体とするプログラムとなった。午後のプログラムの第一は、午前中のショウ氏の講演に呼応する形で英国のオルガン音楽が演奏された。18世紀のスタン

レーから20世紀の作曲家に至る英国オルガン音楽の歴史をたどるレパートリーを、立教学院オルガニストの崎山裕子氏とショウ氏、さらには通称「ギルド生」と呼ばれる立教大学オーガニスト・ギルドに所属する学生二名が演奏した。ヴォランタリーやコラル前奏曲、詩篇曲など幅広い種類の音楽を、礼拝堂の中を自由に移動して場所によるオルガンの響きの変化を確かめながら聴くことのできる非常に貴重な機会であった。

演奏「アングリカン教会の聖歌隊音楽」

プログラムの最後を締めくくるのは、立教学院諸聖徒礼拝堂聖歌隊によるコンサートであった。1919年創設という100年近い歴史をもつ同聖歌隊は、総計90人のメンバーからなる大規模かつ本格的なもので、年間約100回の礼拝奉仕を行う、同大学にはなくてはならない存在である。コンサートは6代目の聖歌隊長となるショウ氏の指揮、崎山氏の伴奏で演奏された。

コンサートは3部構成で、イギリス19～20世紀のアンセムとカンティクルを演奏する第1部と、近現代イギリスとアメリカのアンセムとカンティクルを演奏する第3部が、会衆讃美であるミサ曲、詩篇、聖歌のレパートリーからなる第2部を挟む形式であった。数年ごとにイギリスに赴き、研鑽を積んできた同聖歌隊の真髄というべきレパートリーを、会員一同大いに堪能した。

会場閉会挨拶

最後に、伊東辰彦会長による閉会挨拶で幕を閉じ、その後大学近くの洋風居酒屋に場所を移した懇親会にも10名以上が参加し、大いに歓談、意見交換を行い、非常に有意義な一日となった。

(当学会員)

★テーマ 19世紀以降の英国の教会音楽

★日時 2016年5月28日(土) 10:00-16:30

★会場 立教学院諸聖徒礼拝堂 / マグノリア・ルーム

★プログラム

9:30 - 受付

10:00 - 会長開会挨拶

10:05 - 研究発表

10:30 - 研究発表

10:55 - 休憩

11:00 - 講演 「英国ロマン派のオルガン」

12:00 - リードオルガン説明

12:10 - 休憩 マグノリア・ルームのヤマハリードオルガン試奏

会場：チャペル

13:30 - 総会

14:00 - 英国のオルガン音楽

15:00 - 休憩

15:30 - 演奏「アングリカン教会の聖歌隊音楽立教学院諸聖徒礼拝堂聖歌隊、ショウ・スコット、崎山裕子」

16:30 - 会長閉会挨拶

総合司会・会長 伊東辰彦

伊東辰彦

佐々木悠

川瀬麻衣

ショウ・スコット

赤井 励

崎山裕子、ショウ・スコット

伊東辰彦



★2016年度総会報告

第1号議案

2015年度事業報告および2015年度収支決算の件

第2号議案

2016年度事業計画および2016年度収支予算案の件

※第1号、第2号議案、ともに全会一致で承認された。

★役員会報告

①日 時：2016年3月15日(日) 14:00-15:30

場 所：奏アンサンブル(池袋：東京芸術劇場2F)

出席者：赤井、伊東、手代木

議 題：第16回大会詳細打ち合わせ、学会誌、
ニュースレターについて

②日 時：2016年8月20日(日) 14:00-15:30

場 所：奏アンサンブル(池袋：東京芸術劇場2F)

出席者：赤井、伊東、手代木

議 題：学会誌、ニュースレターについて

③日 時：2016年10月?日(日) 14:00-15:00

場 所：奏アンサンブル(池袋：東京芸術劇場2F)

出席者：赤井、手代木、金澤

議 題：ニュースレター、第17回大会について

★学会誌発行予定

第16号 学会誌……4月半ば刊行予定

内容・巻頭言……新垣壬敏

・論文……伊東辰彦

赤井 励

手代木俊一

川瀬麻衣

佐々木悠

・研究ノート 手代木俊一

・第16回大会プログラム・報告…伊東辰彦

★会員動向

中村証二氏：2016年3月、CD発行（リードオルガン）、

『君もそこにいたのか～オルガンで綴るキリストの生涯～Were you there』(コーベレックス KRS5210)

手代木俊一氏：2016年4月、図書館サポートフォーラム

賞受賞、書誌作成、レファレンス等の図書館活動が評価された。

水野隆一氏：2016年6月、CD発行（合唱指揮：関西学院聖歌隊）、『日ごとの糧を今日も』（コーベレックス KRS5211)

新垣壬敏氏：2016年6月、楽譜刊行(作曲・女声三部)、『金子みすず歌曲集「こだまでしょうか」』（音楽之友社）、この楽曲は既にCD（女声三部、男性四部）になっている。

★会費納入のお願い

会の運営に対して、いつも支援をいただき感謝申し上げます。2016年度会費、また、2015年度の会費をまだ納入されていない方は、ぜひ新しい口座にお振込みくださいようお願い申し上げます。会計係の佐々木は仙台に戻り、住所が変更になりますが、振込口座は変わらずご利用いただけます。よろしくようお願い申し上げます。

キリスト教礼拝音楽学会

郵便振替口座 01360-5-91714

会費等問い合わせ先(佐々木)

住所：〒980-0811 仙台市青葉区一番町1-9-2-604

Mail sshinobuorg@ybb.ne.jp

TEL 022-796-3897

入会金：3,000円(入会時のみ)

年会費：正会員 6,000円

準会員 3,000円

賛助会員 20,000円

・振込用紙には* ____年度/正・準・賛助会員/会費
____を必ず明記ください。

・住所変更等も、お知らせください。

